不定期刊行　　第620号　2017.08.26

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

夏合宿 2勝2敗

大町に赴任して4年目の今年、夏合宿は生徒の希望もあって、栂海新道縦走ということになった。小生自身も久しぶりの栂海新道には心揺さぶられるものがあり、一も二もなく即決した。通しての引率は小生と社会人エキスパート活用事業でお願いしている松田大氏の二人。二村先生には初日と二日目。途中参加したいという生徒もいたので、矢口先生は二日目に入山し、3日目に下山。黒柳先生には矢口先生と生徒二人を連れて二日目に入山してもらい、最終日まで引率をお願いするという体制を取った。人数が多いだけに何があるかわからない。長丁場の縦走で初日、2日目のトラブルで縦走そのものが中止という憂き目に遭うことを避けたかったので、こういった体制で、2日目、3日目のリタイアに備えた。

初日は、朝一番の大糸線で白馬駅に向かった。車窓からは北アルプスが手招きをしてくれているかのようだった。白馬駅からはバスに乗り、猿倉へ。猿倉で今日だけ同行してくれる白馬高校の顧問中嶋先生と合流する。中嶋先生は、クライミング界では名の知れた中嶋兄弟の兄、渉君。今年の新規採用だが、赴任早々山岳部を立ち上げ、頑張っている。一緒に山行はどう？と声を掛けたところ、顧問としての研修にもなるから、初日のみならということで、付き合ってくれた。

生徒は15人にＯＢ1人、大人が4人の大パーティ。7時45分に猿倉を出発。白馬尻を過ぎ、大雪渓へ出たところで松田さんから大雪渓を歩く上での注意が飛ぶ。相変わらず、大雪渓は時折落石がある。注意を聞いた生徒たちは、時に上部に注意をしながら、一歩一歩雪渓に歩を刻んでいく。大雪渓の終了点を過ぎたあたりで、一人の女子Ｔさんが不調となる。彼女は結局風邪をひいていた（3日目には熱が38度5分まで上昇）ようで、終始不調だったが、なんとか最後まで歩きとおした。過換気の症状を示したため、小生が付き添い、他は二村・松田両氏にお願いして先行させた。結局、本隊には40分遅れで14:45に頂上宿舎に到着。遭対協小谷班の宮島さんは元大町高校のＰＴＡ会長、久田君は大町高校山岳部のＯＢ、ゆかりの二人が出迎えてくれた。テントを張って天気図をとっているころ、途中で追い抜いた福島県の白河高校の40人の大パーティも到着した。高校生は今回はこの2パーティだけだった。

夕食はホイコーローにチキンライス、スープ。初日なので食材も豊富で豪華な食事であった。各班夕食を終えたころ、Ｓ君（2年男子）が、「腰痛がひどいため、明日下山したい。」Ｙさん（2年女子）が「到着してから下痢が止まらない。」Ｓ君のことばで気弱になったのか、Ｉ君（2年男子）が「靴擦れがひどいので下りたい。」と言ってきた。合宿初日に先が思いやられる展開になってきた。「無理なら仕方ない。しかし、夏山は高校山岳部の花。簡単に弱音を吐くな。」僕が言うべき言葉を、松田さんが代弁してくれた。「明日、決めたらどうだ。それまで様子を見よう。」と、僕。

朝起きると、ガスっていた。1年のＡ君が「調子が悪いのでＳさんと下りたい。」との

たまう。「なんじゃこりゃ！夏山合宿も満足にこなせないなら山岳部を名乗るな！」再度、松田さんの檄が飛ぶ。・・・結果、下山を決めたのはＳ君一人だったが、高校生というのがいかに脆いか、また逆に強いかを知らされる場面であった。

２日目は５時半に出発。白馬山頂はガスの中、それでも意気軒高に山岳部歌を歌い、今回の最高峰登頂を祝う。コマクサの咲く三国境で二村先生とＳ君を見送り、雪倉岳を目指す。今日からは長丁場だ。ピーカンとはいかないまでも、天気は回復し、まずまずの登山日和である。避難小屋までは基本下りなので、気分的には楽である。盛りを過ぎたウルップソウに交じって秋の花の代表のマツムシソウが目立ち始める。8 時 55 分に避難小屋に到着。10 分の休憩の後、雪倉の登りにかかる。Ｔさんがどうしても足が前に出ず、遅れがちであるが、荷物を分散するなどサポートしながら彼女のペースに合わせて進んでいく。今日はこの山頂を踏めば、基本的には大きな登りはない。10:10 雪倉山頂。生憎ここでもガスが出てきてしまって、眺望は望めなかったのは残念であった。登りはないとはいえ、まだ先は長い。ゆっくりもできない。赤男山を過ぎると、池塘の広がる湿原。すでに盛りを過ぎたハクサンコザクラがところどころ、夏を名残惜しむように咲き残っていた。朝日岳への分岐を分け、水平道に入ったのは 13 時ちょっと前。水平道と名付けられた道が必ずしもそうとは限らない。黒部の水平道同様、この水平道も意外とアップダウンが厳しく、疲れた身体には応える。生徒たちの足取りも重かったが、14:50 朝日小屋到着。16:00 過ぎには、この日蓮華温泉から入山したメンバーも合流して、にぎやかになり、回復の早い高校生たちのテントには笑い声が聞こえた。

しかし、夕刻より雨がテントをうちはじめ、その勢いは激しかった。天気図を見ても、日本列島に帯状に低圧部が居座ったような妙な気圧配置で、明日も明後日も回復を見込めそうもない。このまま突っ込んでも、この先ずっと、雨中の進軍になりそうである。ここは三十六計逃げるに如かず。北又に降りることにした。なんでも麓の朝日町が観光の施策で、タクシー会社と契約し、泊駅まで一律料金（ジャンボタクシー15000 円）の上、乗客１人につき 1000 円を補助してくれるということだった。18 人でジャンボタクシー2 台に乗って、30000 円かかるところ、18000 円の補助、12000 円の負担で済むという朗報も聞いて、即決。生徒を集めてミーティングをし、撤退を告げた。生徒の反応は、「海に行きたかった」「残念」というのが、大方であったが、翌日起きたときの雨で諦めもついたようだった。僕自身も久々の栂海新道でかなり気持ちを入れていたので、実際は残念だったが、あの天気で予備日も取れないので、撤退もやむなしと、無念の敗退となった。

３日目はザンザン降りの雨の中を、5 時半出発。ところどころ川になった登山道を濡れネズミとなって北又へ下った。北又に着いたのは、10 時 45 分だった。大町に赴任して 4 年、夏合宿は毎年３泊４日で計画しているが、初年度の裏銀座縦走の時に続き、3 年ぶりの敗退。冒頭の夏合宿２勝２敗とはその謂である。山で天気には勝てません。